

ネットであつなぐ

九州先端科学技術研究所（I-S-I）や九州大学などの研究チームは、福岡県内でインターネットを通じて農家がハウス内の気温などの環境データを確認したり、流通業者や消費者と意見や情報を交換したりできる「農業SNS」のシステム構築

圃場、生消

に乗り出した。圃場（ほじょう）内の環境に応じた適期作業の他、農家のファンづくりや農業への理解促進、消費者ニーズの把握などにつなげる。活動ではIT（情報技術）企業の参加も促し、農家が利用しやすいシステムを目指す。（鹿住正人）

九大などが農業SNS

の温度・水分を観測。九大が管理するデータベースに自動的に蓄積し、農家は多機能型携帯電話（スマートフォン）などでデータを確認できる。

またインターネット上の交流サイト「フェイスブック」を通じて観測データや作業内容、圃場の画像、コメントなどを発信。ネットワークの登録者は自由に書くことができ、意見も書き込める。ネットワークづくりを進める九大の岡安崇史准教授は「フェイスブックは情報を更新すれば、自動的に登録者に連絡がいく。いつでも最新の情報が届けられる」と説明。反応がすぐにあれば情報発信の楽しみが増え、継続性が高まるとみる。

実証試験には県内10戸の農家が協力。モニタリングシステムでの観測と、スマートフォンでのデータの確認や情報発信を行う。

福岡市西区のハウス37軒でトマトを生産する富永孝文さん（39）は、JA福岡市で同じ生産部会の若手4人と参加。「二酸化炭素の濃度が分かることで、換気のタイミングがつかめる」など、生産面でのメリットを強調する。5戸のデータを蓄積・分析すれば最適な管理法の確立が可能で、生産性の向上につながる」と指摘。他産地の農家との意見・情報交換もできる他、流通業者や消費者と交流することでファンづくりや顧客の増加にも期待する。「消費者の意見がすぐに聞ける」とし、農産物の品質の改善などにも役立つとみている。

作業適期、ニーズ把握

この研究は、「農業SNS」プロジェクトという名称。「農業SNS」ネットワーク・サービス

「ス」と、圃場や施設の環境データをセンサーで測定しデータを収集・管理・発信する「センサー・ネットワーク・サービス」の両方の意味を持た

せた。センサーは九大が開発した「農地環境モニタリングシステム」を使う。気温・日射量・湿度・二酸化炭素（CO₂）濃度、土壌

またインターネット上の交流サイト「フェイスブック」を通じて観測データや作業内容、圃場の画像、コメントなどを発信。ネットワークの登録者は自由に書くことができ、意見も書き込める。ネットワークづくりを進める九大の岡安崇史准教授は「フェイスブックは情報を更新すれば、自

自動的に登録者に連絡がいく。いつでも最新の情報が届けられる」と説明。反応がすぐにあれば情報発信の楽しみが増え、継続性が高まるとみる。

実証試験には県内10戸の農家が協力。モニタリングシステムでの観測と、スマートフォンでのデータの確認や情報発信を行う。

福岡市西区のハウス37軒でトマトを生産する富永孝文さん（39）は、JA福岡市で同じ生産部会の若手4人と参加。「二酸化炭素の濃度が分かることで、換気のタイミングがつかめる」など、生産面でのメリットを強調する。5戸のデータを蓄積・分析すれば最適な管理法の確立が可能で、生産性の向上につながる」と指摘。他産地の農家との意見・情報交換もできる他、流通業者や消費者と交流することでファンづくりや顧客の増加にも期待する。「消費者の意見がすぐに聞ける」とし、農産物の品質の改善などにも役立つとみている。



左上に設置したモニタリングシステムの観測データをスマートフォンで確認する富永さん（手前）。「ハウスの管理に役立つ」と話す。（福岡市西区で）

2013年
1月7日
日本農業新聞
(1面)